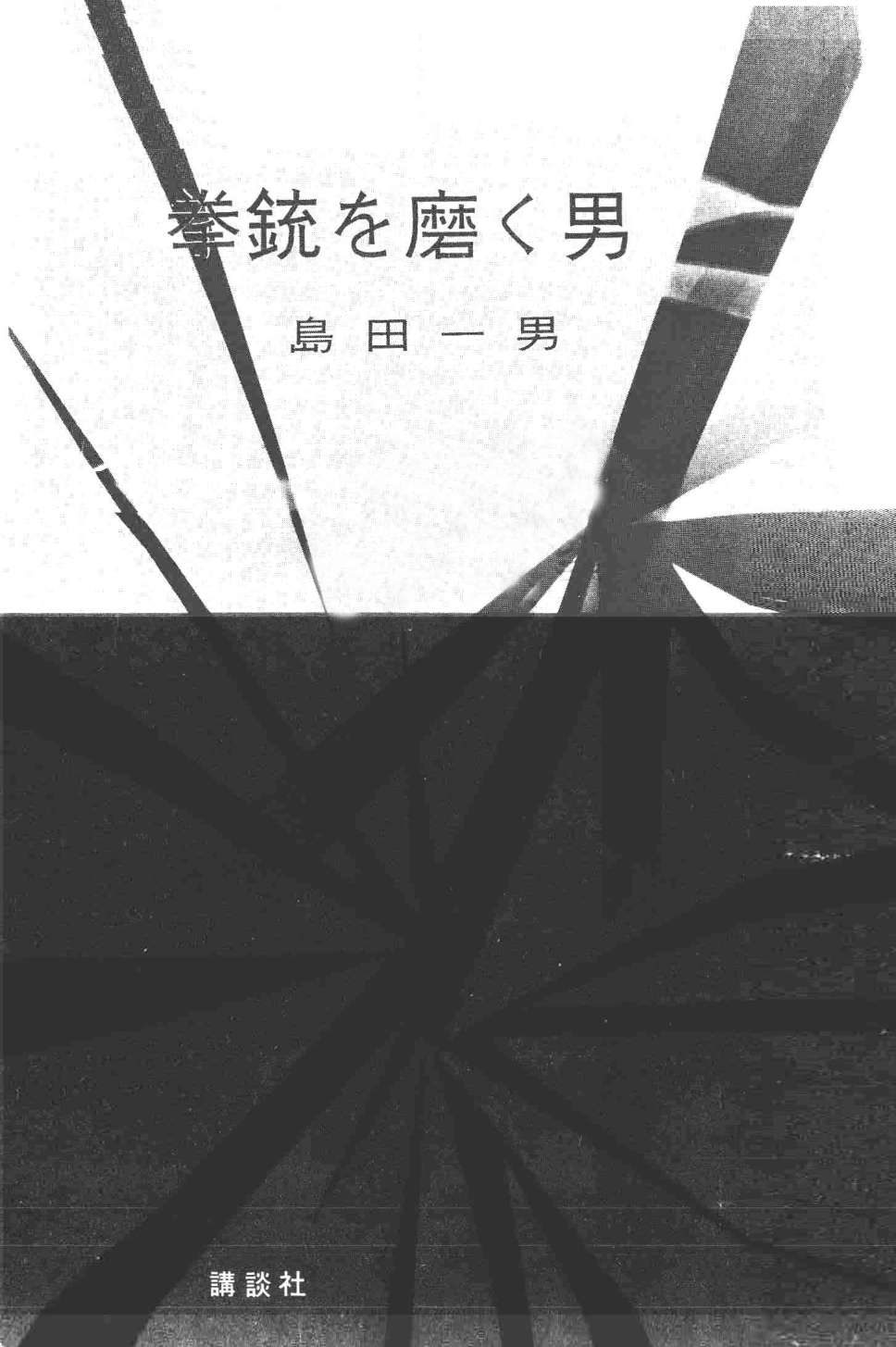


銃を磨く男



拳銃を磨く男

島田一男

講談社

けんじゆう みが おとこ
拳銃を磨く男



昭和34年8月20日 第1刷発行 ￥ 260
昭和34年9月10日 第2刷発行

著 者 しま た かず お
島 田 一 男

東京都文京区音羽町3-19

発 行 者 野 間 省 一

印 刷 所 豊国印刷株式会社

発行所 東京都文京区 株式 講 談 社
音羽町3-19 会社

振替東京3930 電話(94) 大代表3111

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。(製本 大進堂)

© Kazuo Shimada 1959

目次

悪徳の果て	五
悪女の街	一九
妖婦の罨	五
黒い乳房	七七
月に乗る影	一〇二
金髪の死神	一三五
魔女も愛し	一四八
凶運の唇	一七二
妖精の檻	一九四
魔女の爪痕	二二六

装
幀
中
島
靖
侃

拳銃を磨く男

悪徳の果て

1

刑務所の廊下は、むかつくほど油臭かった。——使役の囚人共が、廊下という廊下を、ボーリングの競技場にしてもいい程、油で磨きあげているからだ。

尤も、監房の廊下には、こんな匂いはない。コンクリートの廊下は水洗いするだけである。油の匂いがするのは、事務所の方だけだ。考えように依っては、これは娑婆の匂い、自由の匂い……。そう思えば、ゲロが出そうだななどは云えないわけである。

コッツ……、コッツ……と、主任看守が、気取った足取りで二三歩前を歩いて行く。——死刑囚を、絞首台へ導いて行くときも、やっぱりこんな歩き方をするのだらう……。

所長室には、やつの方が先きに來ていた。

「——さ……、二人共、こちらへ來て……」

所長が、いかめしい表情で、やっと私を、大きな事務机の前に立たせた。

「——犬塚司郎……、加下千里……、規則によって、お前達は、仮出獄の恩典に浴することになった……。おめでとう……」

——おめでとう……と云うときに、所長は始めて微笑を浮かべた。

「犬塚は、医者として、病監でよく働いてくれたじ、改悛の情も明らかである。依って、一級囚人として、刑期三分の二が過ぎたので、仮出獄を具申した……。もう五十も過ぎているのだから、再び誤ちを犯さないように、正しく生きて貰いたい……」

それから所長は、私の方へ顔を向けた。

「加下……。お前は、三級だったね。せめて二級だったら、もっと早く出られたのだが、自ら招いたことだから、止むを得ないだろう。が、刑期三分の二に達したので、仮出獄が出来ることになった。二度と、こんなところへ来ないように……。いいかね」

「いろ／＼お世話になりました。御礼を申し上げます……」

私が云ったのではない。麻薬医者の犬塚が云ったのだ。私は、黙って頭を下げただけである。

「犬塚は妻君が迎えに来ているが……。加下は行く先きがあるのかね？」

——ほう、こいつは意外だ……。やつの女房が来ようとは、私の計算外のことである。女房とは、どんな女だろう、まさか、あの女ではあるまい……。

私は、頬を撫でながら、ゆっくり所長に答えた。

「へエ、あっしも、女房ンとこへ帰りますよ」

「お前の妻君は、一度も面会に来なかったが……」

「あっしが食い込んだんで、なにかと飯代稼ぎに追われてたんでしょよ」

「妻君の商売は？」

「さア……。あっしがとッ捕まったときにや、キャバレーで働いてましたがね……」

それから十分ほどして、犬塚と私は所長室を出た。——看守はついて来なかった。もう囚人ではないのである……。

中庭へ出ると、犬塚はグーッと胸を張って、両足を踏ソ張り、うまそうに空気を吸った。——さき程までの神妙な態度とは打って変わった傲慢な態度である。

犬塚はヘロイン専門の麻薬医者である。新宿の旅館街^{ドヤ街}で注射しているとッ捕まり、三年の判決をうけたが、一年で仮出獄、いま刑務所を出て行くのである。

幾十人かの若い男や女が、犬塚の注射で麻薬患者になり、一生を棒に振った筈だ。その罪がたった一年の獄舎生活で帳消しになるなんて……、安い!! 全く安過ぎる。——こんな悪徳医者は、死刑か、せめて生涯、放りこんでおいてやればいいのだ……。

守衛があけてくれた正門の潜り戸から、私達が出て行くと、七八間さきにとまっていた空色の凄く立派な車から、赤ン坊を抱いた女が現れた。

「——おう! 由美か!」

犬塚が、ニンマリ笑った。

——なんだ、やっぱりこの女か……。

私は、由美を知っている。勿論、むこうでは私を知らないだろう。——由美は、逮捕されるまで、犬塚が中野のアパートに囲っていた女である……。

由美は、ハイヒールをカツ／＼と鳴らして近づいて来ると、抱いていた赤ン坊を、ヌーッと、犬塚の方へ差し出した。

「ど、どうしたのだ、由美!」

「あんたの子よ」

「えッ、この子がッ!」

「あんたが捕まったのでおるそうと思ったけど、遅過ぎて、産まなきゃなくなっちゃったんだよ」

「これは、わしの子か……」

「そうよ。だから、持ってってよ」

「え!」

「今日まで育ててあげたんだよ。あとは、あんたが、お育てよ」

由美は、いや応なしに、赤ン坊を犬塚に押しつけた。

「じゃ、バイ／＼……」

「由美ッ！ 糞ッ……」

だが、由美は、スカートを翻ひるがえして行ってしまった。女を乗せると、車はすぐ動きだした。運転台には男がいる。若い男のようだ。

「——由美ッ、待てッ……」

「よしなよ……」

私は、叫び続けている犬塚の肩を押さえた。

「追っつけっこないやね。ナンバーを覚えといた方が利口だぜ。——ひ7の6969……。ヒナのムクムクだ」

犬塚は、齒をむき出し、唇をふるわせて、見えなくなるまで、車を見詰めていた。

「所長がいった妻君てエのは、いまの女のことかね？」

「妻は、十年前に満洲で死んだんだッ」

「なんだ、いまのは情婦かい……。じゃ、仕方がねエや。お前さんが一年も入獄はこってりや、若い女は飛んでッちゃうよ。でも、面会には来ていたんだろ？」

「始めのうちだけだッ」

「来なくなった頃から、いいのが出来たのさ」

赤ン坊が、嚙みつくような声で泣き出した。女の子のようである。

「——よし／＼よし／＼……」

柄になく、犬塚がうまく赤ン坊をあやした。

「ほう……、泣きやんだね」

「もとは、小児科医さ」

「どっか、行くあてはあるんかい？」

犬塚が腹立たしそうに舌打ちをした。

「ないことはないが……、こんなお荷物をしょっちゃア行けやしない」

「俺ンとこへ来てもいいぜ」

犬塚は、ジロリッと私を睨んだ。

「いつまでもいられちゃ困るが、二日か三日くらいなら……」

「なぜ、そんなことを云うんだ？」

「妙な縁だからさ。一緒に刑務所を出るなんてね。とにかく、バスか電車で新宿へ出ようじゃないか……」

私は、犬塚を促して、郊外電車の駅に入った。電車の方が、バスよりは自由に話が出来ると考えたからである。

屋近くの郊外電車は、ガラ／＼だった。

「——君は、長く入獄^{はく}していたのか？」

「一年八ヵ月……。判決は二年半さ。お前さんより率が悪いや」

「わしは、看守に睨まれるような馬鹿ではない。ネコをかぶってりゃ一級になる。三級なんていうやつは間抜けか、馬鹿だ」

「俺のことを云ってるのかい？」

私達は、電車がとまると黙り、動きだすとすぐ喋^{しゃべ}った。

「俺はお前さんの噂を聞いていたよ。病監に、医者^{いしや}の囚人が働いているってね。お前さんボン刺し医者^{いしや}だってね？」

「覚醒^{かくせい}剤^{ざい}じゃない。麻薬^{まやく}だ」

「ひとりだけ喰いこんだのかい？　ボスは？」

「仲間のことを自白するものかッ。命が惜しいし、出獄してからまた楽をしたいから……。」——沈黙は金なり……と云うのは、わし達の世界のことだ。ところで、君は、やくざか？　愚連隊か？」

「サルベージだ。知ってるかい？　つまり、借金の取立て屋だよ。時には短刀や拳銃をチラつかせる借金とりさ」

「恐喝か……」

「似たようなものだな……」

新宿駅のホームに降りると、ラジオの時報が聞えて来た。——三時である。

犬塚は、赤ン坊を抱いて、私について来た。同じ日に刑務所を出た仲間として、いまはすっかり安心してゐるようである。

——どっこい……。俺はお前とお前のボスや仲間を狙っているのだぜ……。

ただ困ったのは赤ン坊である。——お膳立てはうまくやった積りだが、由美が現れたことと、赤ン坊が押しつけられたのは、全く予定外のことであった……。

もう一ツ弱ったのは、家である。私の計画では、宿なしをよそおって、飽く迄犬塚に喰い下つてやる積りだったが、現実には反対になってしまった。

が……、国電の駅へ入って行ったとたんに私の考えは決った。

——高子のアパートがいい……。この時間にいるかな……。とにかく行ってみよう……。

「——四谷……」

私は、十円玉を二ツ放り出して、切符を二枚受けとった……。

「——まあ、あんた……」

驚いている高子を押し除け、犬塚を廊下に残して、私はズカ／＼と中へ入った。

入口に続く四畳半と、奥が六畳……。台所は付いているが、便所は共同らしい……。

私は六畳へ入ると、押入れをあけ、眼に付いたスーツケースへ、内ポケットに隠していた拳銃を放りこんだ。

「——あんたッ！　いったい——」

高子に、それ以上口をきかせなかった——。素早く抱き締めて、ちよいと唇を吸ってやったのである。

「——いいかい。僕は一年半振りで帰って来た君の情夫いいとこだよ、刑務所帰り……。その積りでバツを合せてくれ」

私は、小声で、高子の耳にささやいた。

「お仕事ね？」

「そんなものだ」

「じゃ……泊る？」

「或はね？」

今度は、高子の方から私を抱き締めた。

「——誰も、いないようだなア……」

私は、犬塚へ聞えるように、わざと大きな声で云った。

「なんのこと？　あたし、ひとりよ」

「変な男でもいたら、ひッぱたいてやる積りだったんだ」

「馬鹿ねエ……」

入口の方から、赤ン坊の泣き声が聞えた。

「おっと、忘れてた。ミルクを買って来てくれないか」

「どなた？」

「友達だよ。乳のみ子を抱えてるんだ」

しばらくして、私と犬塚は六畳で向かい合った。——赤ン坊は、高子が抱いて、ミルクを買いに行ったのである。

犬塚は、陰気に黙りこみ、何か考えている。

私は押入れをあけて、さっきのスーツケースを引きずり出し、投げこんでおいだ拳銃をとり出して分解した。

「——ちえッ！　ちよいと錆が来たかな……」

私はひとりごとを云いながら、ハンカチでゴシ／＼と銃口を磨いた。

「——弾は？」

犬塚が、眼を光らせていた。

「あるよ」

「いつも、そいつを持って歩くのか？」

「商売道具だからね」

「おい、頼みがあるんだ」

ひと膝乗り出す犬塚を、私は、ふンと鼻で笑って、拳銃を手の上で踊らせた。

「こいつは譲れないよ」

「いや……。君だって、出獄早々で金がいるだろう」

「儲け仕事なら片棒かつぐぜ」

「よし……。ペンと紙を貸してくれ……」

十分ほどして、犬塚は、幾度も書き直した手紙を私に差し出した。——封筒の上書きは、バー・桂御主人様……とだけである。

「新宿の歌舞伎町だ。区役所の裏だよ。まとまったものを呉れる筈だ」

「お前さんの知ってるのは一年前のことだろ。酒場の浮き沈みは激しいぜ」

「もしなかったら、そのまま戻って来てくれ」

「一体、いくら貰って来るんだね？」

「百万……」

「吹っかけたなア！」

「貰ってもいいわけがあるんだ。また、さし当ってそれだけなけりや、由美のやつに復讐は出来ない」

私は封筒を持って立ち上った。

「詰まらないことだ。あんな女のこととは忘れた方がいいぜ」

「わしは、眼には眼、齒には齒と云う主義なんだ」

私は拳銃をスリッケースに戻し、押入れに仕舞いこんだ。

「俺を信用出来るかい？ 百万円持って逃げるかもしれないぜ」

「逃げられるもんか。お前、女房に惚れてるようだから……。ま、悪いことは云わない。無事に仕事をしてくれたら、タップリ札はする積りだからな」

私は、苦が笑いをしてアパートを出た。

「——あんだ……」

赤ン坊とミルクの罐を抱えた高子がかけて寄って来た。

「変な男がいるわ。ジロ／＼あたしの部屋の方を見ているのよ」

私は、高子の視線を追った。——秋口だというのに、真ッ黒なボロシャツだけで上着を着ていない若い男が、少し離れた電柱の蔭に立っている……。

「わかったよ。あとは頼むぜ」

「何かたずねられたら、どうすりゃいいの？」

「黙って、ニヤッと笑やアいいんだ。——ふーむ、なか／＼口が硬いなど、向うで勝手に推察してくれる」

高子は、ちょッと口ごもったが……、

「今夜どうしましょう？ お布団は二タ組あるんだけど、二タ組じゃ……」

「結構じゃないか。お客さまに一ト組、僕達が一ト組……」

「あたし達、他人よ」

「その通りだ、君は飲み屋千里十里の看板女中、僕はそれを張りに行つて狼常連……。だけど心配するなよ。僕は手と足を縛つて寝る」

「馬鹿……。そんな真似したら、おッ放り出してやるから」

私は、ちょっと高子の頬ッペタをつついてアパートの石段を駆けおりた。

電柱の蔭の若い男が、とっさに、横丁へ駆けこもうとした。
が……、私の方が早やかつた。

「おい刑務所からずッと尾行て来たのか……」

「何をッ」

私はツイッと男の手首を掴むと、ニヤッと笑ってやった。

「うッ……」

男の顔が見る／＼まッ赤になつて行つた。

「仲よくしようぜ、お利口さん……」

「い、痛てエッ」

「バー・桂ッてのを知つてるだらうな」

「しッ、しら——」